

乗鞍岳大丹生池のハイイロマメシジミ

近藤 紀 巳*・井 上 好 章

Pisidium cinereum Alder in the Oonyu-ike pond at Norikuradake

Toshimi KONDO · Yoshiaki INOUE

はじめに

ハイイロマメシジミ *Pisidium cinereum* Alder は、二枚貝綱、鮮菌亜綱、マルスダレイ目、マメシジミ科に属する淡水産二枚貝である。世界的にみると、周北極圏に広く分布する北方系種である。しかし、ハイイロマメシジミは日本でほとんど確認されていない。

丹生川村史自然編の編纂のため乗鞍岳大丹生（おおにゅう）池を調査したおり、大丹生池でハイイロマメシジミを確認したので報告する。

調査結果

1. 調査地点

乗鞍岳大丹生池は、国内で最も高所を通る道路である乗鞍スカイラインの終点である豊平駐車場から、歩いて約1時間30分の地点にある堰止湖である。大丹生池の湖面の面積は約7,000m²、最深部約3mである。標高は2,337mの高所であり、周りには樹木が生育する樹林帯の中に位置している。Fig.1 に、大丹生池の位置を国土地理院発行の25,000分の1の地形図「乗鞍岳」で示した。大丹生池を環境庁自然環境保全基礎調査用メッシュ地形図の50,000分の1の地形図「乗鞍岳」に従うと、乗鞍岳5437-15-53と表される。Table 1 に大丹生池の概略をまとめた。

調査日は1996年9月16日で、当日の大丹生池の状況は午前9時15分の時点で気温10.9℃であり、水温及びpHを5地点で測定した。水温は10.3℃~12.5℃、pHは6.83である。それらをTable 2 にまとめた。また、Fig.2 におおよその測定地点の概略図を、Fig.3 に大丹生池の概略断面図を示した。同時に、Fig.4 に乗鞍スカイラインから見た大丹生池、Fig.5 に大丹生池の近景写真を示した。

Table 1 大丹生池の概略

湖面面積	約7,000 m ²
最深部	約3 m
標高	2,337m
メッシュ地形図No.	乗鞍岳5437-15-53

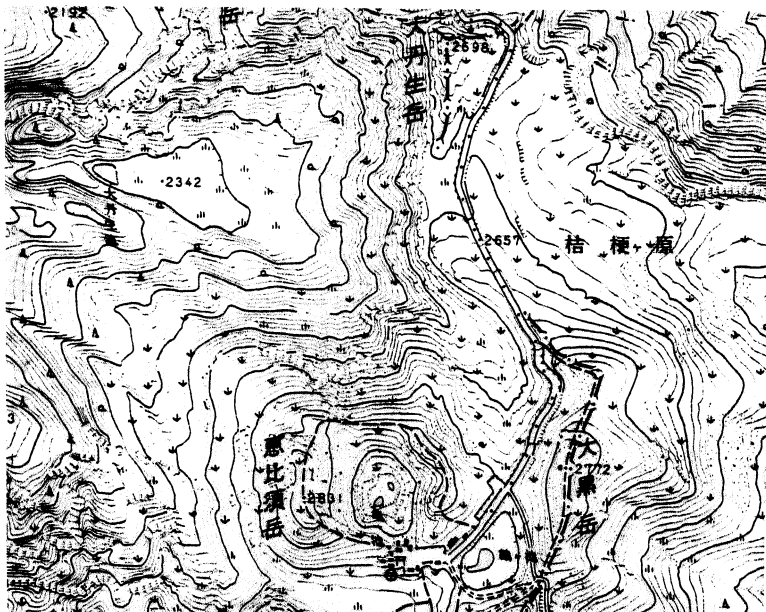


Fig.1 大丹生池の位置（国土地理院発行の25,000分の1の地形図「乗鞍岳」より）

Table 2 大丹生池の状況 1996年9月16日

項目	地点					測定時間
	A	B	C	D	E	
水温	12.5℃	11.3℃	11.3℃	11.2℃	10.4℃	—
pH	6.83	7.00	6.93	6.84	6.99	—
深さ(約)	0.2m	0.5m	1.0m	0.1m	1.0m	
気温	10.9℃	—	—	—	—	AM9:15

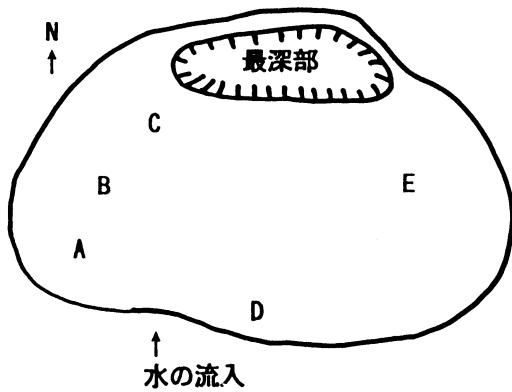


Fig.2 測定地点の概略図

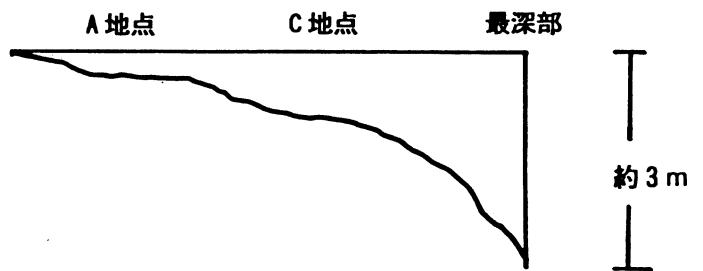


Fig.3 大丹生池の概略断面図

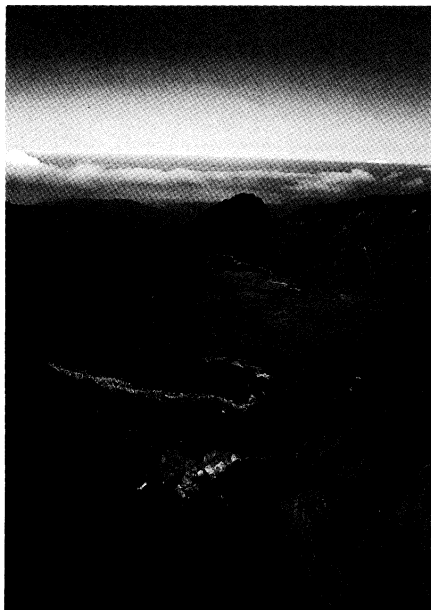


Fig.4 乗鞍スカイラインから見た大丹生池



Fig.5 標高2,337mに位置する大丹生池

2. 標本の計測値

調査地点Aで採集した標本を測定したところ殻長3.6mm, 殻高3.3mm, 殻幅2.4mmとなった。Table 3にそのデータをまとめた。同定はMORI (1938)の検索表に従って行った結果、ハイロマメシジミと判定された。Fig.6にハイロマメシジミの写真を示した。

Table 3 標本の計測値

項目	計測値
殻長	3.6mm
殻高	3.3mm
殻幅	2.4mm



Fig.6 大丹生池で確認したハイイロマメシジミ (目盛り:1mm)

3. ハイイロマメシジミの棲息数

水温、pHを測定したA～Eの5地点で調査したところ、豊平駐車場の方向から水が流れ込み、浅瀬になっている調査地点A及びDで多く確認された。ただし、定量的には行っていないため、棲息数は明確に確認できていない。

4. これまでの記録

ハイイロマメシジミは国内ではわずかに北海道阿寒湖と栃木県湯の湖の二ヶ所では確認されていなかった。乗鞍岳大丹生池での棲息確認は日本で三例目となり、棲息地としては国内で標高が一番高い地点である。

ただ、本種にはミズウミマメシジミやニッコウマメシジミなどの4亜種が記載されており、これらの亜種は国内各地で採集されている。

5. ほかに棲息を確認した生物

ハイイロマメシジミのほかに、クロサンショウウオの幼生及びマメゲンゴロウが多数棲息していた。ほかの水生生物は確認できなかった。ただし時期によっては、高山性のトンボのヤゴが確認されると思われる。

考察

このような高地にマメシジミの仲間が水路を伝わって分布拡大してきたことは考えがたい。水野(1977)はカモの水掻きの間から小さな巻貝を確認したことがある。このハイイロマメシジミも、水鳥の水掻きの間に挟まって運ばれてきた可能性が考えられる。

今回の調査は丹生川村村史の調査だったため、時間が限られていた。そのため、乗鞍岳に点在する池で確認したハイイロマメシジミは大丹生池だけだったが、時間をかけて調査を行えば、さらに高所の鶴ヶ池、権現池、五ノ池などほかの池においても棲息が確認できる可能性はあると考えられる。

また、マメシジミ類は国内において20種類以上が棲息しているといわれているが、それらの区別は難しく、マメシジミの分類は不明瞭な点があるとされている。

波部(1973)によると、今後の研究によって、マメシジミは数種類にまとめられるといわれている。その時は、ハイイロマメシジミの分類が変わることが十分考えられる。

謝辞

ハイイロマメシジミを同定くださり、また本文を草するにあたっての検閲など、全般にわたりご指導いただいた大阪教育大学教養学科自然研究講座の近藤高貴助教授に深く感謝する。この調査に同行し、水生生物のご教示をいただいた岐阜県立斐太農林高等学校の渡辺千洋教諭に感謝する。

また、この調査の機会を与えてくださった丹生川村村長はじめ村史関係者にお礼申し上げる。

文献

- 波部忠重 1973 軟体動物 上野益三編集 川村日本淡水生物学 pp.309-341 北陸館
- 肥後俊一, 後藤芳央 1993 日本及び周辺地域産軟体動物総目録
- 水野寿彦 1977 日本淡水プランクトン図鑑(改訂版) 353pp 保育社
- MORI S. 1938. Classification of Japanese *Pisidium* Memoios of College of Science, Kyoto Imperial University, Series B,14 (2) ,255-278,5plates.
- 大津高 1975 月山・葉山地区の小湖沼出羽三山・葉山総合学術調査報告